

B—86 年齢増加に伴う色彩嗜好の変化に関する研究（第1報）

—女子生徒を中心とする—

東京家政学院短大 今井 弥生

○松崎 和子

1. 発達段階からみた色彩嗜好の変化は、これまでの研究者が、個々におこなった調査結果を総合することによって、その時点における実態を知ることができる。しかし、調査条件、方法が異なるために、多少ニュアンスの相違が生じている。さらに個人の色彩嗜好を年齢増加と関連づけた追及は、ほとんどなされていない。本研究は長期にわたり、この問題を明確にすることを目的とした。そして、その第1回のデータをえたので報告する。

2. 東京家政学院中学生および高校生を学年別に110名ずつランダムに抽出して、計660名を被験者とした。被験者の年齢は12～18歳までに限定した。調査の時期は1965年11月中旬の晴天の日を選び、北窓日光下（室内の照度50LX以上）に試料をおき、質問紙法により、好きな色と嫌いな色を3色ずつ選出させた。試料および色彩の分類方法は、調査用カラー・コードに準拠した。

3. 中学生および高校生を通じて、年齢増加に伴う嗜好の変化を、各学年に対し色彩嗜好の順位を出し、一致係数を求めてみた。好きな色嫌いな色共に一致係数は高い。次に中学生高校生別に比較した場合、中学生よりも高校生が、好きな色、嫌いな色共に一致係数が高い。以上の結果、中学生および高校生共に、関心を示す色が、大体一致しているといえる、すなわち高年齢になるに従って嗜好がはっきり示され変化が少なくなってきたと思われる。